

# 校長室の窓から

## 本質をえがくということ



『サン＝ラザール駅』／クロード・モネ  
1877年 マルモッタン・モネ美術館

クロード・モネ（1840-1926/フランス）という印象派の画家を皆さんもご存じかと思います。

今回は、そのモネの作品から、絵画の見方・考え方そして、児童のえがく絵について話したいと思います。

左にある絵はモネがえがいた『サン・ラザール駅』というタイトルの絵です。今から10年ほど前、東京都美術館で開催された「モネ展」で実物を見ました。縦65cm×横81cmの絵で普段見る油絵のサイズとしては、普通の大きさなのですが、実際に目の前で見ると、立派な額に入っていたことでもあります。本物の持つオーラなのか、えらく大きなサイズに見えます。この絵の何がすごいのか、

というと、何とんでも「その場にいるような臨場感・空気感」に包まれ、一瞬で圧倒されてしまうところです。写真ではなかなか伝わりませんが、150年ほど前にかかれたにもかかわらず、この絵からは、煤くさい匂い、蒸気の熱、湿気、空気のうねり、轟音までも感じ取る（イメージする）ことができます。「これが、モネのすごいところなんだ」と改めて思い知らされました。

私が尊敬している日本画家の千住博さんは、著書の『わたしが芸術について語るなら』の中で、モネの作品について、こう述べています。「自然の中に身を置き、筆を持ったときに五感に訴えてきた、風の音、温度、匂いなどの目には映らないものを目で見えるような形にしてえがいている。これがクロード・モネの作品なのです。クロード・モネの作品を通して、教えられることは、『美術とは見えないものを見るようにすること』なのです。」

本物そっくりの写実的にかかれた絵であっても、それ以上何も感じない絵とはわけが違います。つまり、モネのえがく絵には、対象となるものや風景の“本質”がえがかれているのです。

実は、図工や美術の時間に子供たちのえがく絵や表現の中にも、そうした“本質”をえがいた作品または、えがこうとしている場面に出会うことがあります。うれしい気持ち、動物の鳴き声や迫力、お菓子の甘い匂い、レーシングカーのスピード感…などなど。えがく対象を忠実にかいているかどうかは関係ありません。そこにある“本質”を見落とさず、しっかり、具体的に褒めてあげることが大切です。ご家庭においても、お子さんが絵をかいたときに、「すごい！今かいている車はとっても速そうに見えるね」なんて、言えたら最高です。お子さんはきっと絵をかくことが好きになることでしょう。

